

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	13
瑪瑙集	25
紅玉集	28
俳誌交歓	29
3月号月評	30
惠贈句集拝見(30)	32
惠贈俳誌拝見(7)	34
特別作品「白夜行」	36
琥珀集作品鑑賞	38
瑠璃集作品鑑賞 I	39
II	40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	41
他誌転載	43
批の国父の蒼天(24)	44
大和文華館・松柏美術館吟行	46
京のかど掃き	48

今月の一句

校倉の一角見えて春障子

桂 樟蹊子

(昭和三十四年作)

奈良西ノ京の唐招提寺で詠まれた句である。唐招提寺の東側の東室を借りての句会の折、東側の障子が少し開いていて、そこから春の日差しをいっぱいを受けた校倉の一角が見えていたと言う。その豊かな眺めにしばし目を留められた師の慈顔が昨日のことのように浮かび懐かしさも一入である。

隆子

落の臺

塩路隆子

山彦の間の一瞬や深雪晴
燦然と鴟尾跳ねてゐる雪後かな
雪原にまどかなる月無音なる
久に詠む犬養節や歌かるた
枯野行く黒衣姿の山頭火
嬰^やを待つところにも似て落の臺
母逝きて雪の鷗となり賜ふ

三月号光耀抄

塩路 隆子選

手毬唄主役は紀伊のお殿様
雪降らば人は孤独を樂しめる
雪搔きてうすら夜明けとなりけり
凍星をひとつ残して峽白む
宛先は羽柴長吉賀状書く
守護靈に鯨が憑いてゐるといふ
放たれて犬は枯野の風になり
初富士や出湯に素謡ひびかせて
休刊や注連飾りたる輪転機
国起しのいかづちひびく大旦
鱧鱔を納めし蔵のなまこ壁
雪国の土産に貰ふこけしかな
年の暮母手作りのにしん漬
菟道てふ町に卯年の初明り
初日待つ地球の自転覚えつつ
式木立つ鞠庭四角淑気かな
大寒や古紙回収車取り逃がす

竹内 悦子
小澤 菜美
能勢 栄子
松岡 和子
宮崎 左智子
常田 創
中本 吉信
北尾 章郎
阪本 哲弘
伊藤 憲子
坂上 香菜
安本 恵子
山崎 里美
山口 キミコ
宮田 香
栗倉 昌子
石川 かおり

冬至来て防災備品確かめる
文部省唱歌うたひつ雪を踏む
綿虫の浮遊空間嵯峨の径
妻の座といふは厚顔寒の雲
雪しづる音にも慣れて山の寺
神の闇深々とあり聖夜ミサ
あるだけの杭を占拠やゆりかもめ
伝説のジュゴンと遊び明の春
裸木の掲げし「ソメイヨシノ」札
神杉の一等星を着ぶくれて
初茜輝く千木の春日杜
神苑に高き嘶き淑気満つ
湯殿にも薄日さしたる冬至かな
滝凍つるも水の流れを記憶せる
凧揚げて風の怖さを知りにつり
グループはB級グルメ女正月
武将塚をなほも攻め継ぎ冬將軍
千年の恋は実らず雪女郎
未だ温き妻の手白し窓の雪
暖房車メールする人眠る人

伊東 和子
岡 佳代子
桂 敦子
川崎 利子
坂根 宏子
大島 みよし
中川 すみ子
増田 一代
前川 ユキ子
和田 郁子
笠井 清佑
藤見 佳楠子
杉本 綾
塩路 五郎
鈴木 照子
田下 宮子
田中 芳夫
森下 康子
高谷 栄一
三川 美代子

果もなく星座の話落葉焚
初対面の住民同土雪を搔く
厄払ひ終へし境内銀世界
生れし嬰を主役に据ゑて初座敷
鉄鉦の兄の靴音冬更けて
雪うさぎ溶けて赤き実残しけり
穏やかなお宮参りや寒日和
元朝の空を吸ひ込み気功法
回されて独楽美しや色弾み
椀盛りの大根ひと切れ梵字入
嬰はまるで因幡のうさぎ初湯かな
山茶花の頃の全快治療終ふ
をとこ坂一気に上り初詣
駈け抜けむ梢の上に雪をんな
初釜の捌き手まぶし炭点前
雪竹の風情眺めて朝湯かな
大根の不揃ひながら干されけり
柚子湯して軋む五体を浸しけり
ミニ飾餅にも格のありにけり
設ひを終へし安堵や柚子の風呂

吉田 希望
和田森 早苗
山本 節子
山本 孝夫
山本 丈夫
横田 矩子
松田 和子
松田とよ子
藤本 秀機
長濱 順子
中村 ふく子
西垣 順子
西田 史郎
谷口 俊郎
田村 幸子
富田ヒナ江
田中 浅子
笹井 康夫
佐用 圭子
清水侑久子

柁のこぼるる花やピアニシモ
 地球儀に日本は赤し寒波来る
 雪はげしひと日厨に煮物の香
 新聞にくるまれ届く土根深
 まばゆきを鎮めて雫の金閣寺
 底冷えの底のあたりの京の朝
 寒風を読みつつ海老の打瀬漁
 まぼろしの駄菓子屋恋し一葉忌
 磯の香を撒きつつ句座のほんだはら
 老老へ子の気配りや煤籠
 床飾り終へて新年待つばかり
 静かなるドア並びけり冬日射
 凜として交す挨拶雑煮膳
 今朝はやも芥^{こみ}狙ひ来る初鴉
 葬済みし夜の固き餅切りにけり
 年の瀬の花売りに来るローカル車
 キッチンに正月用の食溢れ
 古代よりさざめき謡ふ冬の湖
 豪商の歴敷囲みし枯葉音

片岡久美子
 紀川 和子
 木戸 宏子
 小西 和子
 小林 久子
 青山 正英
 井口 淳子
 池田加寿子
 伊藤 純子
 大松 一枝
 飯田美千子
 伊庭 玲子
 上甫木伊都子
 字治 重郎
 落合 晃
 山内 節子
 西村 敏子
 田中 久子
 伊藤 和子

琥珀集

白魚鍋

小澤 菜美

枷解きて女同志の白魚鍋

除夜詣父に躓きたる日の遠き

寒卵独りの朝の始まれる

雪降らば人は孤独を楽しまむ

莊巖に朝より聳え雪の嶺

火の音を囁す餅搗き湯気の中

紀伊の夜や寒漁火の妖しさに

年はじめ

竹内 悦子

初雪

能勢 栄子

珍しや信濃馬刺の年忘

高西風に脱兔のごとく家路かな

福寿草咲くに間のあり妣の家

除夜詣三井の鐘音数へつつ

鴨よ鴨羽繕ひせよ年はじめ

手毬唄主役は紀伊のお殿様

瑞雲や海ほどもある湖に

初雪の後の明るき空の青

雪搔きてうすら夜明けとなりけり

屋根の雪二階の窓を塞がむと

松葉蟹脳の髓までしゃぶられて

大根の漬かり加減を客は褒め

猿かしら喰ひ荒されて吊し柿

賀状書く阿波の鳴門のひとり身へ

メリークリスマス 松岡 和子

雪降る夜五右衛門風呂の至福かな

大寒の虹の根あたり仄明り

仰山の電飾メリークリスマス

銘々に墨痕淋漓いはひ箸

凍星をひとつ残して峽白む

産士のいとシンプルな松飾

くの一の落葉樹海を駆け抜ける

賀状書く 宮崎左智子

青首を伸ばして大根出荷待ち

まだ生きるつもりワタシ冬が好き

身の箍のきーんと張れり空つ風

大晦日猫に膝貸す呑気夫

過去といふ玉手箱あり囲炉裏端

重話の姿変へたるオードブル

宛先は羽柴長吉賀状書く

寒 鴉 常田 創

大寒やひと口だけの水を飲む

葉牡丹の筋を残して喰はれけり

宴会を抜けて奈良町息白く

鼻唄とすれ違ふなり寒の月

守護霊に鯨が憑いてゐるといふ

寒鴉豊かなごみを欲しけり

廃屋の椿は鳥によきところ

枯 野 中本 吉信

放たれて犬は枯野の風となり

風に葉を盗られし跡に冬木の芽

安穩にひと日過ぎしを初日記

児等去りて部屋空ろなる三日かな

些かの年酒に深き酒の酔ひ

冷やかしがいよいよ本気マスク取る

磯馴松北風吹く方へ順へり

初富士

北尾 章郎

ぴんぴんころり

伊藤 憲子

商談は顔売りしのみ年詰まる

炬燵据う纏はる猫に老兆し

会釈せるその眼に覚え大マスク

事始舞妓ゆくみちたもとほる（祇園・十二月十三日）

初日射す天気予報をくつがへし

初富士や出湯に素謡ひびかせて

独楽強き子供やら頼もしく

初 曆

阪本 哲弘

陸中路

坂上 香菜

頑にパソコン拒み賀状書く

我が家にも十大ニュース日記果つ

転勤を告ぐる子の声初電話

初曆子の大厄を確むる

通院の町筋美しき松の内

休刊や注連飾りたる輪転機

どんど火に身ぬちの暗鬼灸り出す

国起しのいかづちひびく大旦

健康を絵馬に託せり初詣

初詣ぴんぴんころりに願ひこめ

白髪はわが勲章や初鏡

賀状より跳ね出しさうな兔かな

震へ字の友なつかしや年賀状

冬天へ蹴鞠追ふ声「あり」「やあ」「おう」

みちのくの大雪煙原野かな

新雪を踏みて楽しむ軋み音

地藏立つごとく檜葉垣雪明り

大樹いま氷柱すだれや陸中路

軒にブイ吊す蟹の家年送る

鱻鮓を納めし蔵のなまこ壁

山神を祀りし漁村初景色

こけし

安本 恵子

雪国の土産に貰ふこけしかな
風呂を焚く冬の山家に嬢住み
万両のふえて懐あたたかし
海のなき信濃が故郷冬りんご
毛糸編む妹を器用と母は言ひ
庭の雪とけて現はる陶狸かな
夜更かしの窓辺に立てる雪女

にしん漬け

山崎 里美

年の暮母手作りのにしん漬

「雪恨めし」と母の電話や里訪へず

母宛に家族揃ひの初写真

初茜白一色を染めにけり

初詣甘酒のみし娘の微酔

庭に剪る松と万両活けにけり

凍て落葉踏めばザクザク音高き

スカイプ

山口キミコ

スカイプの年賀あいさつ海越ゆる
菟道てふ町に卯年の初明り
三年の日記始まる大旦
ふるさとの「若潮迎へ」父の役
柚子浮かべ長湯となれり恙なく
降圧剤休めぬ齡去年今年
散りそうで散らぬ余生や冬もみぢ

泥大島

宮田 香

五尺余の橋にも名あり水涸るる

オペを待つ女ひたすら毛糸編む

ボロ市の泥大島の渋味かな

初日待つ地球の自転覚えつつ

ほつれ毛の女つばさや黒シヨール

キャンパスに花格の低き垣

白衣着て風邪の体を立て直す

淑気

栗倉 昌子

冬至

伊東 和子

式木立つ鞠庭四角淑気かな

枝鞠を奉じ始めに初蹴鞠

初春や鞠装束の美しき

「あり」「やあ」「おう」掛声高く鞠始

新玉の沓音高し鞠を蹴る

山門の扁額凜と風凍つる

三山を巡り眼裏冬紅葉

福 笹

石川かおり

賀状来る

岡 佳代子

鳥集ひ木々震はせる冬日和

人波に福笹の鯛見え隠れ

軒下に寄り添ふ小猫寒の入り

大寒や古紙回収車取り逃す

冬帽に一割ほどの男前

床の間に香の鎮座水仙花

海坂に滲む夕日や寒湯治

巡り合ふ終弘法の赤絵皿

ゆく年や人の恩には倍返し

冬深し句座の半ばのカプチーノ

買初や源氏好みの香袋

歳の市縁起細工の風物詩

冬至来て防災備品確める

分別のごみの空き缶冬の普

文部省唱歌うたひつ雪を踏む

何気なくマフラー重ね風避ける

頼られし頃の母恋ひ除夜の鐘

かたくなに髪型変へず去年今年

捨てられぬ煩惱あまた冬銀河

すこやかに今を楽しみ去年今年

つぶやきのごとく小文字の賀状来る

冬日和

桂

敦子

寒林

坂根

宏子

綿虫の浮遊空間嵯峨の径

花八っ手はじけ咲かせる葉艶かな

裸木の妙なる姿並木道

夕日差す枯野にわれの影長き

ひとひらの雲と鳶の輪冬日和

嘶家の当意即妙冬うらら

蒲団より気合入れねば起きられず

妻の座

川崎

利子

除夜の鐘

大島みよし

檀の実裂けし古木に支へ杭

大吟醸飾り元旦下戸家族

旧友を懐しむ子や冬帽子

妻の座といふは厚顔寒の雲

寒念佛五臓六腑に染み込める

子を頼むと今際のことば寒椿

何処となく懈き閑節餅を焼く

陽の射して寒林の影オブジェ風

雪しづる音にも慣れて山の寺

二府一県囲む山々眠りけり

グライダーの大旋回や寒日和

応援のサンタマラソン河川敷

白菜の白の鉢巻整列す

青空へ鞠高々と初蹴鞠

一部屋の香り馥郁畳替

ひたすらに人を追ひ行く十二月

着ぶくれて押さるるもよし押すもよし

都鳥両翼風に膨らませ

電飾の彩るビル間降誕日

神の闇深々とあり聖夜ミサ

余生とは今生きること除夜の鐘

ゆりかもめ

中川すみ子

男体山

前川ユキ子

山茶花のこぼるる垣に竹箒

法螺を吹く托鉢僧の息白き

初雪や音沙汰のなき同ひ年

あるだけの杭を占拠やゆりかもめ

派手目などと気にせぬ八十路緋のコート

のぞみ号をキャンセルさせし夜の雪

ばんぼりの大き男の冬帽子

初 茜

増田 一代

羽子板

和田 郁子

初茜おかげ参りのお伊勢さん

新玉の年の悠久五十鈴川

年迎ふ老い忘れさせ鳥羽の海

伝説のジユゴンと遊び明の春

初笑ひ演技愉快に海馬^{アンカ}たち

餌を求め日差しの中の初雀

マイウエイはゆつくりと決めお正月

裸木の掲げし「ソメイヨシノ」札

酢荖買ふマニキュア赤き異邦人

骨董を値踏む金髪初弘法

雪化粧男体山のワイドビュー

天を突く未完のタワー初御空（スカイツリー）

初景色古都を俯瞰の鬼瓦

一病の人の優しさ春を待つ

神杉の一等星を着ぶくれて

初夢をカラーで見しが瞬時なる

おほどかな神馬まなざし初詣

七種のけふのやすらぎ粥の味

デパ地下の蒲鉾パレード年の暮

羽子板の音懐かしや空青き

紅梅ののぞく築地や蔵屋敷

瑠璃集

冬 棄

杉本 綾

美容院でスーパ―で会ふ師走人
明るきに襖貼り替へ年迎ふ
湯殿にも薄日さしたる冬至かな
蕭条のなか冬菊の気品かな
生きること使命と思ひ冬木の芽

初 茜

笠井 清佑

福達磨

塩路 五郎

天平の大鐘響く除夜詣
釣鐘の緑青深し初日射
飛火野の蒼空広き恵方道
初茜輝く千木の春日杜
佐保川の若芹摘める七日かな

桐火桶

藤見佳楠子

凧揚げて

鈴木 照子

神苑に高き嘶き淑氣満つ
新雪に煌めく二本エツジ跡
兎跳ぶ耳の長短弾ませて
書き出しは何れも同じ寒見舞
大正を偲ぶよすがの桐火桶

初日さす碑に万葉の恋の詩
幼はやデートを約し初電話
読初の「むかしむかし」を児が囲み
風邪声のばあばは魔女が徹り役
凧揚げて風の怖さを知りにけり

三月号月評

塩路 隆子

新年初の句会から得た句の数々をご紹介します。どの句会も皆様の活気に溢れ、びんびんと覇気と緊張が伝わる良い句会であったことを大変嬉しく思ったことをまずお伝えして月評を始めたい。

手毬唄主役は紀伊のお殿様

竹内 悦子

覚えている手毬唄が二つある。一つは義経の「父は尾張の露と消え母は平家に捕らえられ 兄は伊豆に流されておのれひとり鞍馬山」と物悲しい。もうひとつはてんでんまりの唄、「もしもし紀州のお殿様 あなたの国の蜜柑山 わたしに見せてくださいな」とお願いをする。そうして殿様に「抱かれてはるばる旅をして」とうとう山の蜜柑になってしまったという童謡などを歌いながら鞠つきをしたものである。作者は後者を思い出されたようである。昨今はサッカーボールを足で蹴っていた子はよく見かけるが、これもブームのご時世であろう。「主役は紀伊のお殿様」とうまく纏められた。忘れかけていた童謡を懐かしく美しい色や柄の毬を思い出させてくれた句である。

雪降らば人は孤独を楽しまむ

小澤 菜美

今年の雪の多さは格別である。守山に住まれる作者であるが今年のような大雪がふると、その深深とした冷えや静けさは周囲と隔離されたようにうら淋しいものである。しかし作者はそれをただ孤独と感じずに「孤独を楽しまむ」と気持ち切り替えておられる。その気持ちが嬉しくエールを送りたい。作者自身が透明感のある一方で、万華鏡のごとく、めくるめく浮かぶ白銀世界の様々な景色を楽しんでおられる。作者の嬉々とした姿が浮かびその感動が伝わる句である。

雪掻きてうすら夜明けとなりけり

能勢 栄子

綾部市に住まれる栄子さんから、元旦の朝五時半頃から五十センチ程もある雪掻きをしたとお便りをいただいた。小学生の頃よく遊んだおさな馴染の一人である。また、お正月過ぎにその二年生の頃の先生から心のこもった丹波の産物を宅急便で送っていただき、久しぶりに母の暖かさに出会った思いがした。懐かしい人、温かい人そう言う人達に今の私を育てていただいたとの感懐で一杯である。雪掻きの大変さと言うまでもない。大仕事を終えたあとの寧らぎが中七に、下五の「なりにけり」の余裕をもった表現がこころのゆとりを感じさせる。